

「第10期介護保険事業計画」策定のための 介護予防・日常生活圏域ニーズ調査結果の概要

高齢者の暮らしや健康の状況（運動機能・転倒・口腔機能・閉じこもり・栄養状態・認知機能・地域での活動等）と、地域の現状や課題等を把握するため、「介護予防・日常生活圏域ニーズ調査」を行いました。

そして、今回の調査結果（以下「今回調査」という。）について、その結果概要を前回の調査結果（以下「前回調査」という。）との比較を用いながら分析を実施しました。

◆今回調査期間：令和7年12月3日～12月19日

調査方法	配布数	回収数	回収率
郵送法	2,508票	1,808票	72.1%

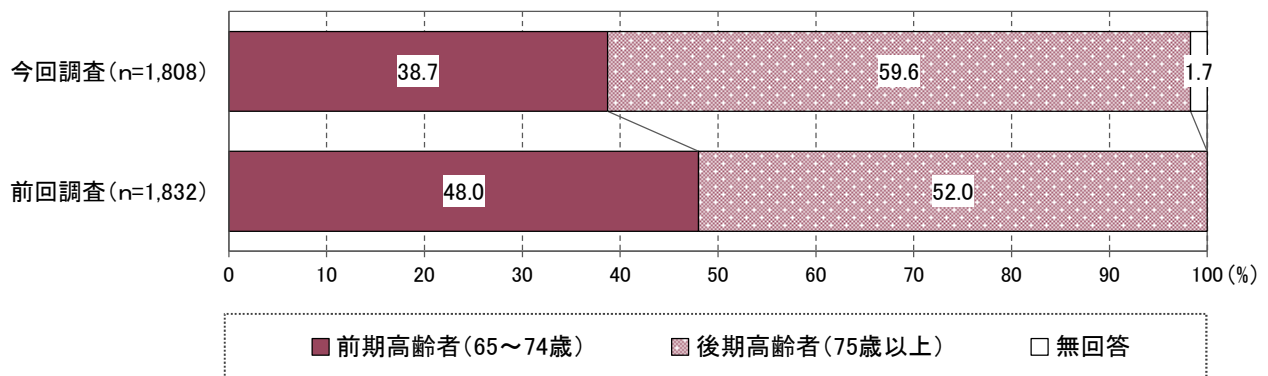
◆前回調査期間：令和5年1月5日～1月27日

調査方法	配布数	回収数	回収率
【配布】郵送 【回収】郵送または WEB回答	2,581票	1,832票	71.0%

（1）回答者の年齢

今回調査では「前期高齢者（65～74歳）」が38.7%、「後期高齢者（75歳以上）」が59.6%となっています。

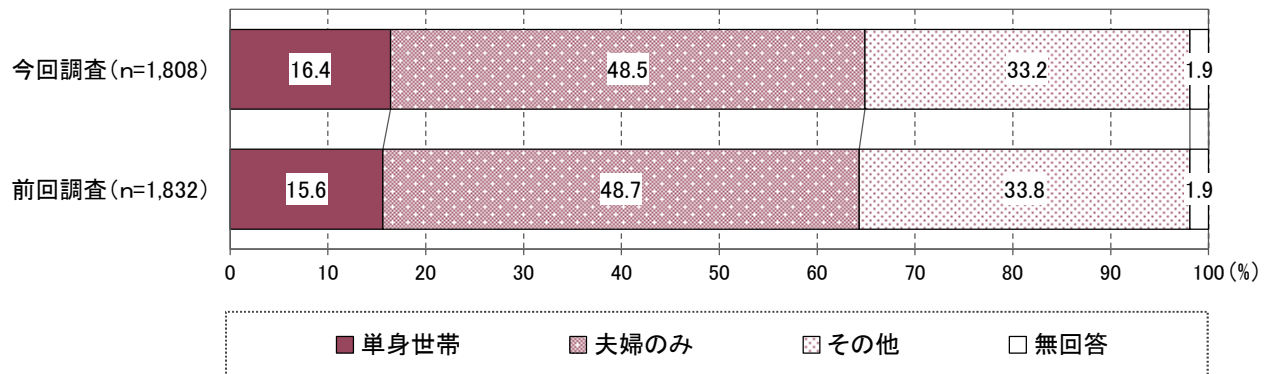
前回調査と比べて、後期高齢者の割合がやや高くなっており、回答者全体の高齢化の進行がうかがえます。



(2) 高齢者世帯の家族構成

今回調査では「単身世帯」(16.4%)、「夫婦のみ」(48.5%)、「その他」(33.2%)となっています。

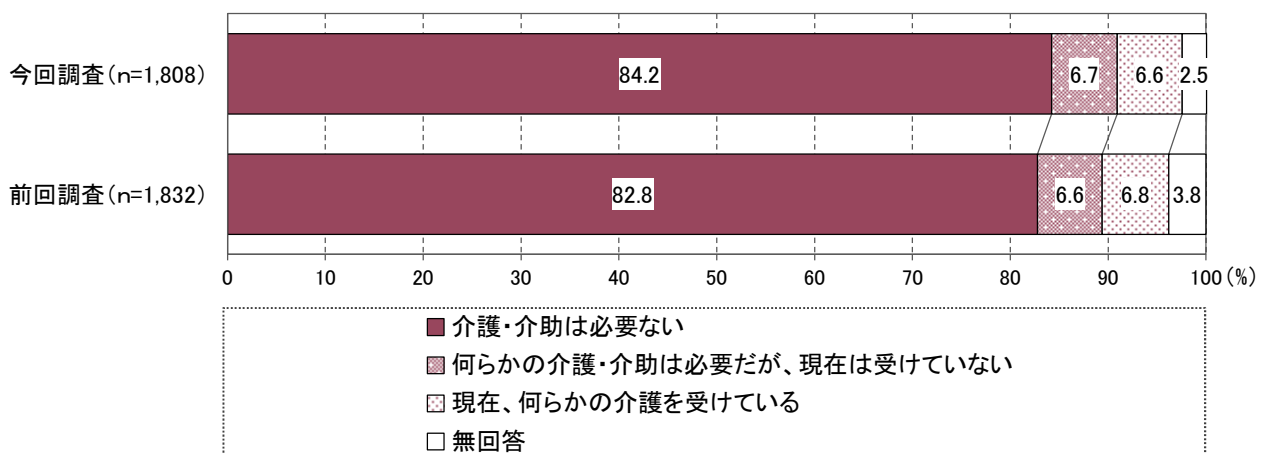
前回調査と比べて、単身世帯がやや増加し、その他世帯の割合がやや減少しています。単身世帯と夫婦のみ世帯を合わせた高齢者のみ世帯は全体の約6割を占めており、引き続き見守りや生活支援体制の充実が求められます。



(3) 介護・介助の必要性

今回調査では「介護・介助は必要ない」が84.2%と最も高く、次いで、「何らかの介護・介助は必要だが、現在は受けていない」(6.7%)、「現在、何らかの介護を受けている」(6.6%)の順となっています。

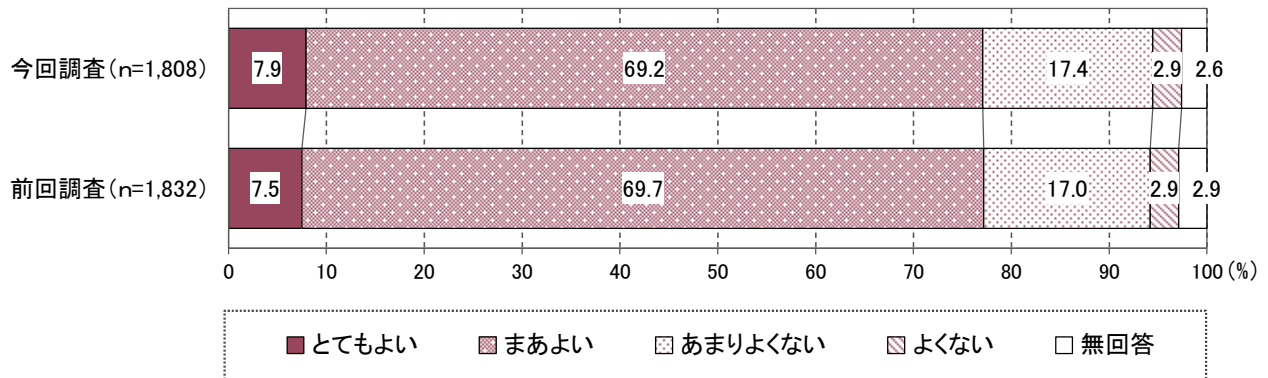
前回調査と比べて、「介護・介助は必要ない」の割合が1.4ポイント増加しています。



(4) 健康に関する意識

今回調査では「まあよい」が69.2%と最も高く、次いで、「あまりよくない」(17.4%)、「とてもよい」(7.9%)の順となっています。

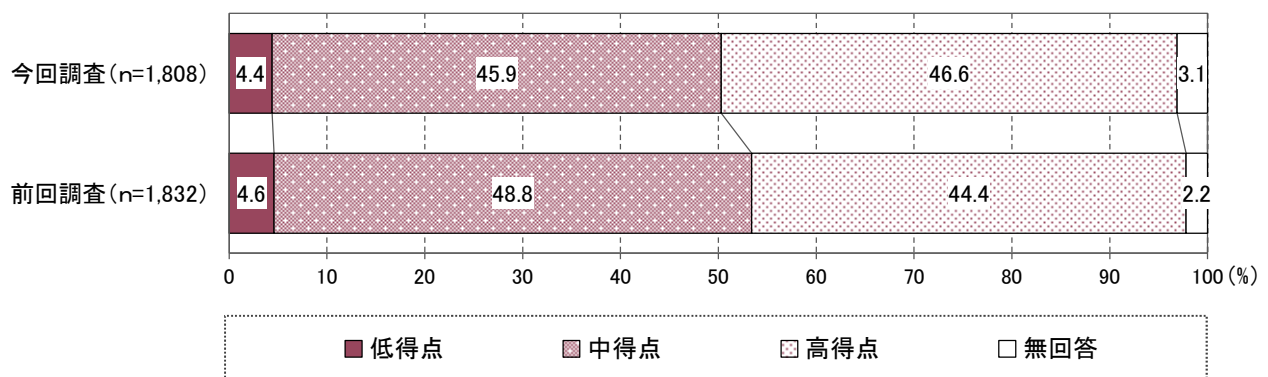
「とてもよい」と「まあよい」の合計は77.1%であり、前回調査と比べて大きな変化はみられません。高齢者が良好な健康状態を維持できるよう、引き続き健康づくりの取組を推進していくことが重要です。



(5) 主観的幸福感

回答者が感じる幸せの程度について、「0点」から「3点」を”低得点”、「4点」から「7点」を”中得点”、「8点」から「10点」を”高得点”とすると、今回調査では”高得点”が46.6%と最も高く、次いで”中得点”(45.9%)、”低得点”(4.4%)の順となっています。

前回調査と比べて、高得点の割合が2.2ポイント増加しています。引き続き、高齢者の幸福度の維持・向上につながるよう、各施策のさらなる推進が求められます。



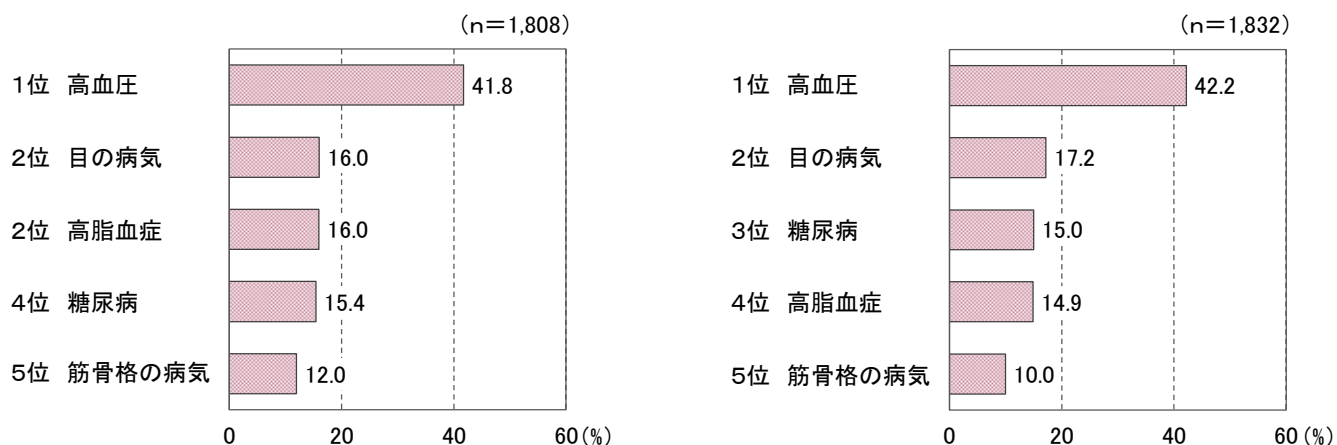
(6) 治療中または後遺症のある病気

今回調査では「高血圧」が41.8%と最も高く、次いで、「高脂血症（脂質異常）」・「目の病気」（16.0%で同率）、「糖尿病」（15.4%）の順となっています。

前回調査と比べて、高血圧・目の病気の割合はやや減少していますが、高脂血症及び糖尿病の割合が増加しており、生活習慣病の予防・管理に資する取組の推進が引き続き重要です。

◆【今回】 令和7年度

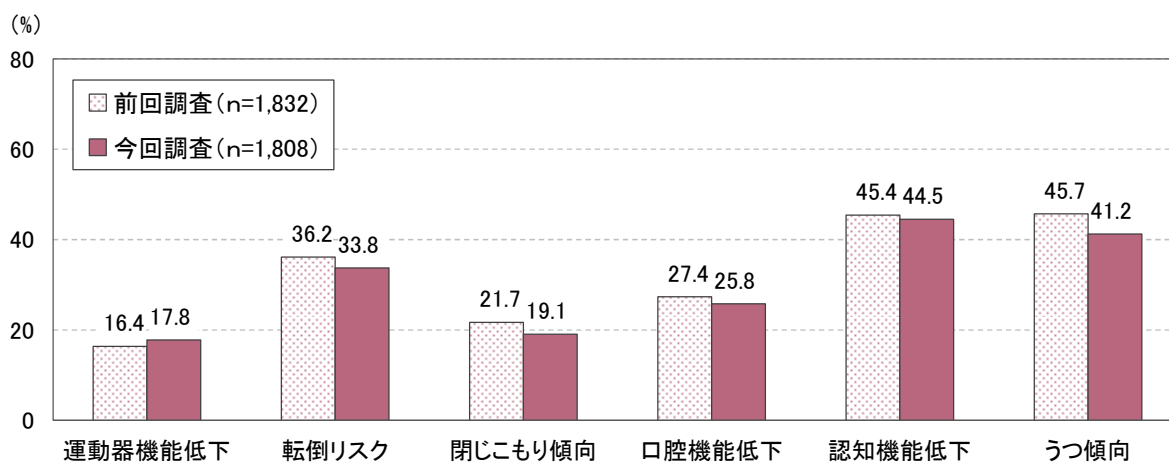
◆【前回】 令和4年度



(7) リスク判定結果

国（厚生労働省）が示す「介護予防・日常生活圏域ニーズ調査実施の手引き」に沿って、調査結果をもとに高齢者のリスク判定を行いました。

前回調査と比べて今回調査では、「運動器機能低下」が16.4%から17.8%へと増加しています。一方で、「転倒リスク」は36.2%から33.8%へとやや低下し、「閉じこもり傾向」は21.7%から19.1%へと減少しています。また、「口腔機能低下」は27.4%から25.8%へ、「認知機能低下」は45.4%から44.5%へ、「うつ傾向」は45.7%から41.2%へと、いずれも前回より低下しています。



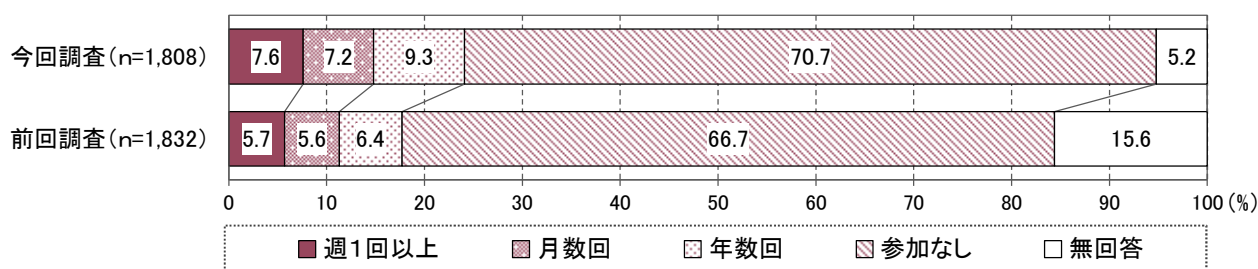
(8) 高齢者の社会参加と生きがいづくり

会やグループ等への参加頻度については、前回調査と比べて、今回調査では概ね次のような傾向が見られました。なお、無回答については「参加なし」とみなしています。

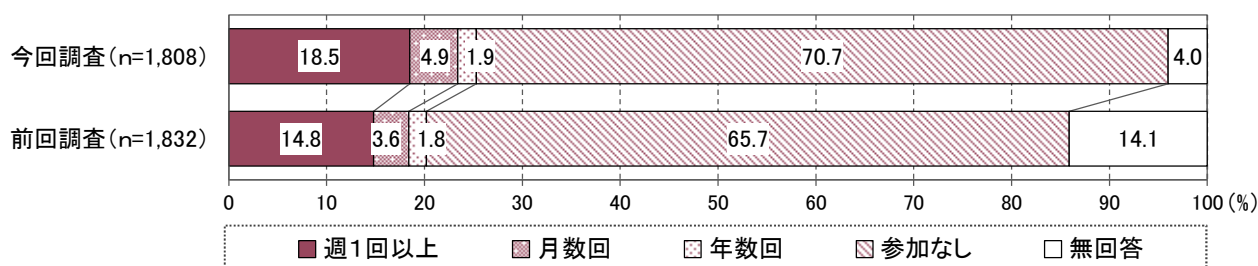
【前回調査との比較結果】

- ・①ボランティア活動では、「年数回」の参加が前回より増加しており、低頻度での参加が広がっている。
- ・②スポーツ関連のグループ及び③趣味関係のグループでは、「週1回以上」「月数回」「年数回」のいずれも参加割合が前回より増加しており、参加層の広がりがうかがえる。
- ・④学習・教養サークルでは、「参加なし」が増加し、全体としてやや参加が減少傾向にある。
- ・⑤通いの場及び⑥老人クラブでは、「月数回」の参加が前回より増加している。
- ・⑦町内会・自治会では、「月数回」の参加が増加している一方で、「参加なし」も増加しており、二極化がみられる。
- ・⑧収入のある仕事については、就労している高齢者の割合が前回よりやや増加している。

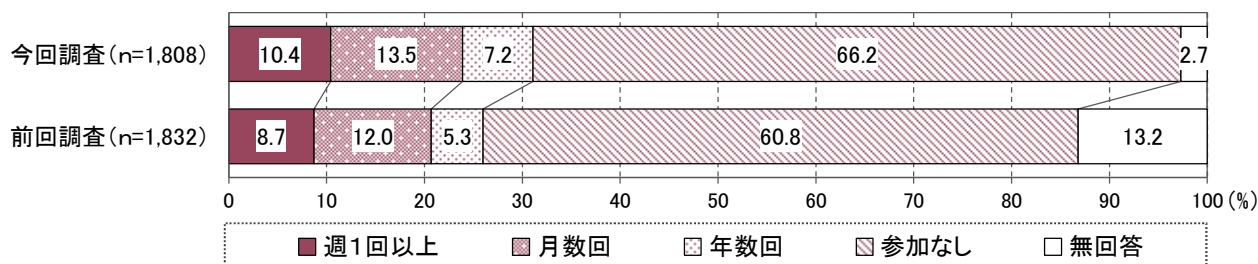
①ボランティアのグループ



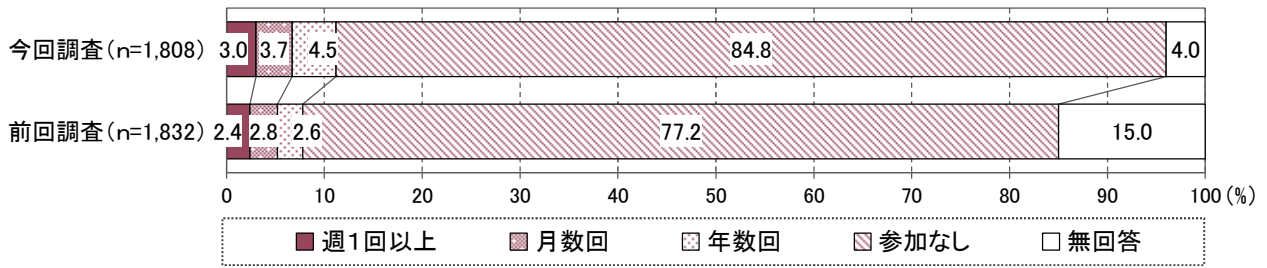
②スポーツ関連のグループやクラブ



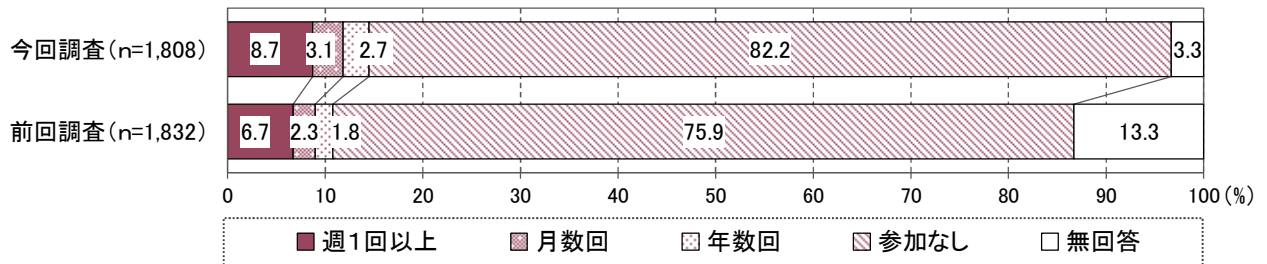
③趣味関係のグループ



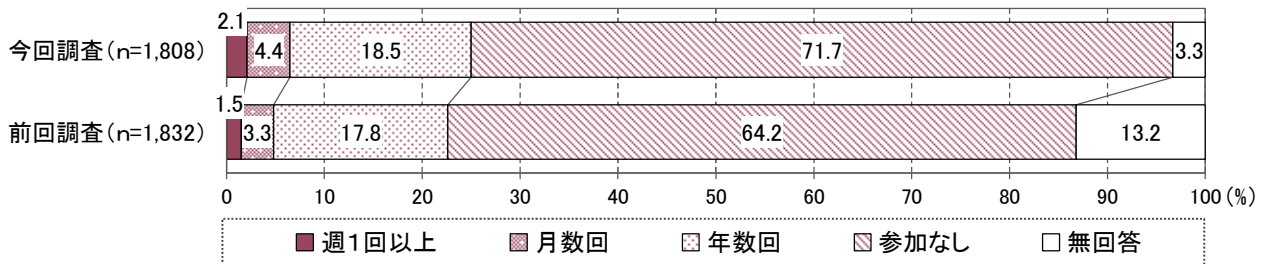
④学習・教養サークル



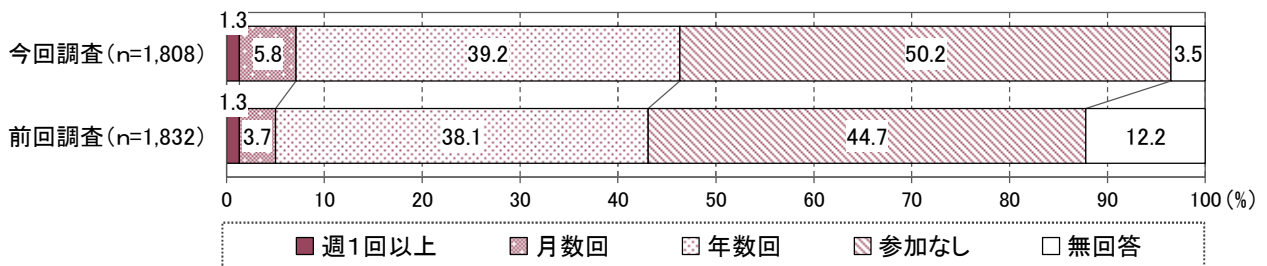
⑤介護予防のための通いの場



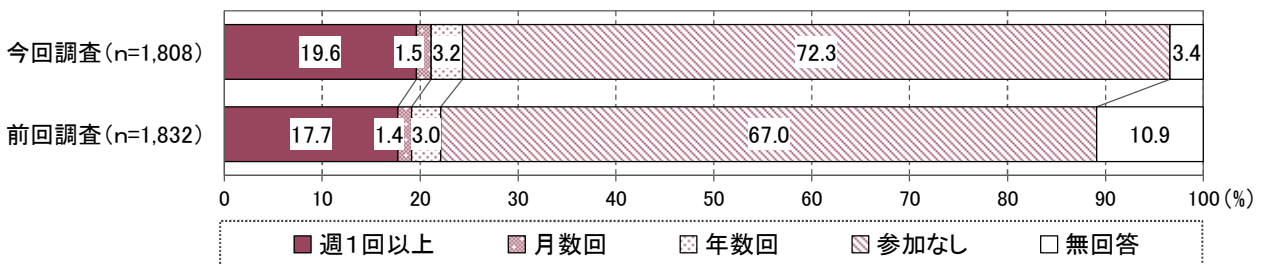
⑥老人クラブ



⑦町内会・自治会



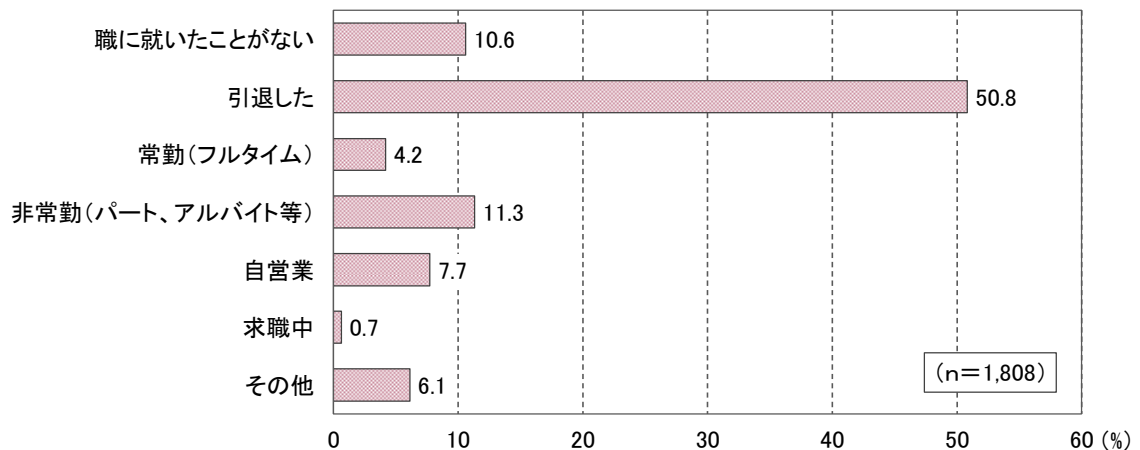
⑧収入のある仕事



(9) 就労状況

今回調査において、「引退した」が50.8%と最も高く、次いで、「非常勤（パート、アルバイト等）」（11.3%）、「職に就いたことがない」（10.6%）の順となっています。

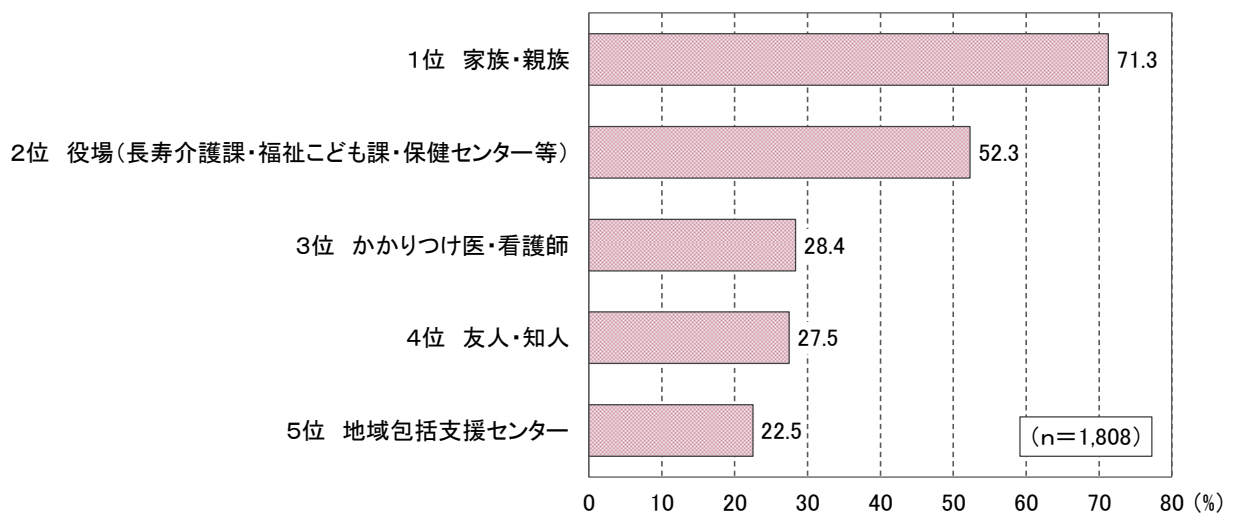
◆【今回】令和7年度 ※前回調査には同様の設問はありません。



(10) 相談先・地域包括支援センターの周知状況

今回調査において、「家族・親族」が71.3%と最も高く、次いで、「役場（長寿介護課・福祉子ども課・保健センター等）」（52.3%）、「かかりつけ医・看護師」（28.4%）の順となっています。

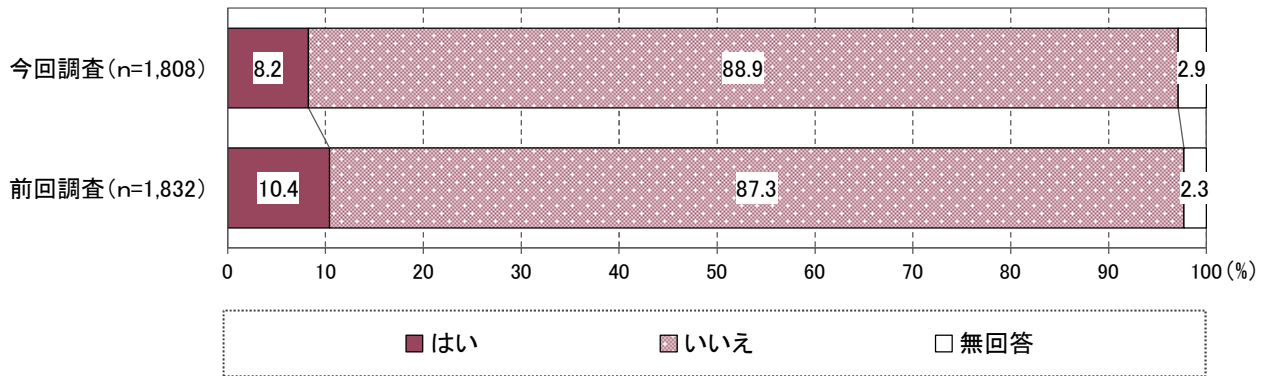
◆【今回】令和7年度 ※前回調査には同様の設問はありません。



(11) 本人または家族で認知症症状の有無

今回調査では「いいえ」が88.9%と高く、「はい」が8.2%となっています。

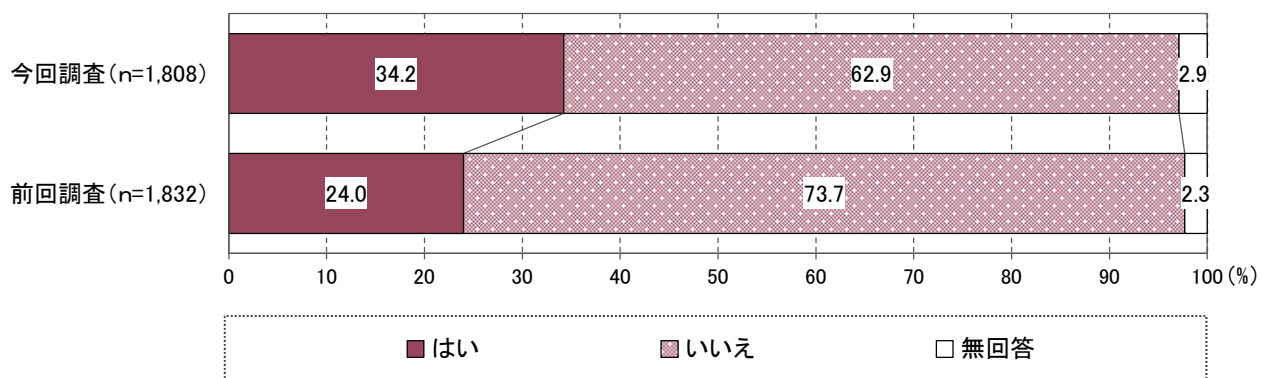
前回調査と比べて、「はい」（認知症の症状があるまたは家族に認知症の症状がある人がいる）と回答した割合は2.2ポイント減少しています。



(12) 認知症に関する相談窓口の認知

今回調査では「いいえ」（知らない）が62.9%と高く、「はい」（知っている）が34.2%となっています。

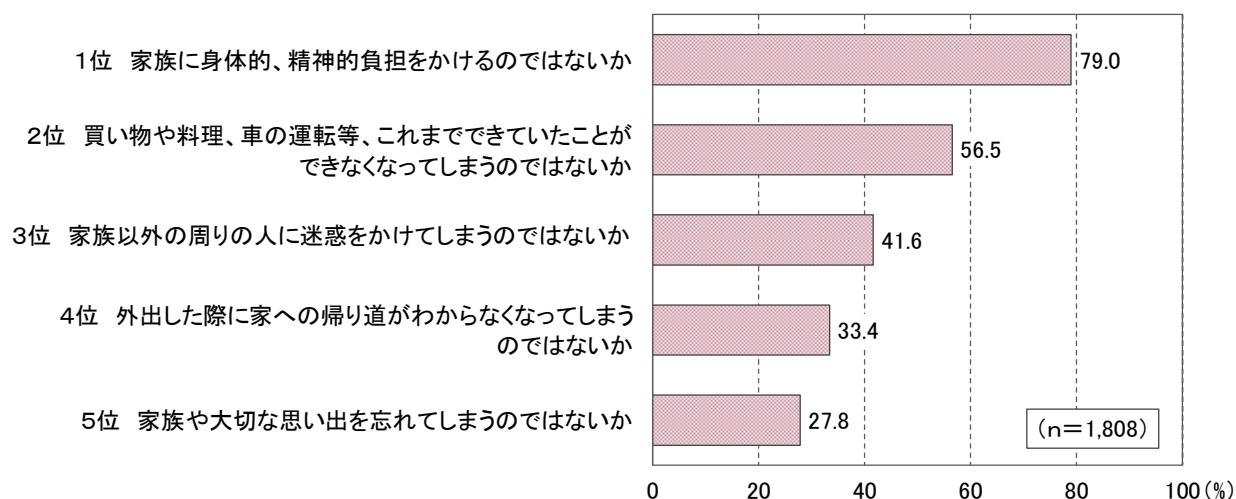
前回調査と比べて、「はい」（知っている）は10.2ポイント増加しており、相談窓口の認知が着実に広がっていることがうかがえます。



(13) 認知症になった場合の不安

今回調査において、「家族に身体的、精神的負担をかけるのではないか」が79.0%と最も高く、次いで、「買い物や料理、車の運転等、これまでできていたことができなくなってしまうのではないか」(56.5%)、「家族以外の周りの人に迷惑をかけてしまうのではないか」(41.6%)の順となっています。

◆【今回】令和7年度 ※前回調査には同様の設問はありません。

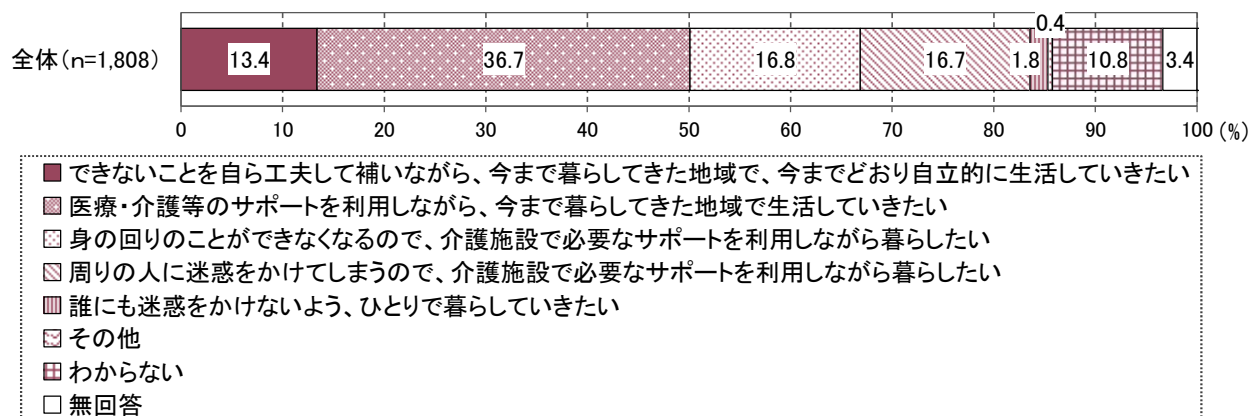


(14) 認知症になったらどう暮らしたいか

今回調査では「医療・介護等のサポートを利用しながら、今まで暮らしてきた地域で生活していきたい」が36.7%と最も高く、次いで、「身の回りのことができなくなるので、介護施設で必要なサポートを利用しながら暮らしたい」(16.8%)、「周りの人に迷惑をかけてしまうので、介護施設で必要なサポートを利用しながら暮らしたい」(16.7%)の順となっています。

地域での生活継続を望む高齢者が多数である一方、介護施設での生活を選択肢として考える層も少なくないことがうかがえます。

◆【今回】令和7年度 ※前回調査には同様の設問はありません。



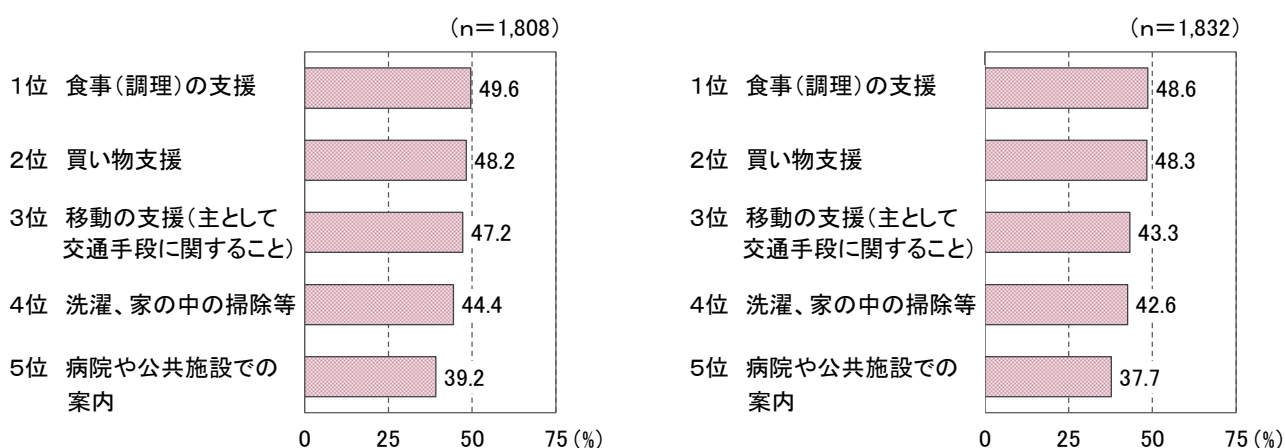
(15) 将来、介護や介助が必要になった場合、どのような支援を受けたいか

今回調査では「食事（調理）の支援」が49.6%と最も高く、次いで、「買い物支援」（48.2%）、「移動の支援（主として交通手段に関すること）」（47.2%）の順となっています。

前回調査と比べて、「食事（調理）の支援」・「移動の支援（主として交通手段に関すること）」・「洗濯、家の中の掃除等」・「病院や公共施設での案内」で支援ニーズが拡大しています。

◆【今回】令和7年度

◆【前回】令和4年度



※設問の選択肢が前回と異なるため、同一の選択肢のみ比較対象としています。

主な結果は以下のとおりです。

- 回答者の約6割が後期高齢者であり、前回調査より高齢化が進んでいる。世帯構成は、単身世帯と夫婦のみ世帯を合わせた高齢者のみ世帯が約6割を占め、単身世帯はやや増加傾向。
- 健康面では、主観的健康感が「よい」と回答した割合は約8割で前回と大きな変化はなく、主観的幸福感の高得点層はやや増加。一方、治療中の疾病では高脂血症や糖尿病の割合が増加しており、生活習慣病対策の継続が求められる。
- リスク判定では、「転倒リスク」「閉じこもり傾向」「うつ傾向」等が前回より改善した一方、「運動器機能低下」は増加しており、運動機能の維持・向上に向けた取組の強化が必要。
- 認知症に関しては、相談窓口の認知度が前回より10.2ポイント向上する等、周知の成果が表れた。認知症になった場合の不安としては「家族への負担」が約8割と最も高く、暮らし方の希望では「地域で暮らし続けたい」が最多。
- 将来必要な支援としては、「食事の支援」「買い物支援」「移動の支援」が上位を占め、いずれも前回から支援ニーズが拡大。日常生活を支える在宅支援体制の充実が引き続き重要な課題。